

豊島与志雄「蠱惑」論 ——西洋文学の受容を中心に——

はじめに

大正三年二月、豊島与志雄は東京帝国大学仏文科二年次に在学中、同人として芥川龍之介らと第三次『新思潮』を創刊した。大正三年三月に発表された「蠱惑」は、豊島が『新思潮』に寄せた第二作であり、処女作「湖水と彼等」⁽¹⁾と出世作「恩人」⁽²⁾に挟まれた作品である。単行本などには収録されず、後に『豊島与志雄著作集』第一巻（未来社、昭和四十二・六）に収録された。本作は、久米正雄が「異常な神経と、病的な空想から来る、一種の神秘的な世界が展開される。氏の第二作「蠱惑」は正にかくの如きものである」⁽³⁾と評したように、主人公が、よく立ち寄るカフェーで自分の分身と見なす男と交渉した、その異常な体験を回想したものである。豊島は、大正初期から第二次世界大戦後にかけて長く作家として活躍したが、「古井戸」（『中央公論』大正十四・十）、「奇怪なる話」（『経済往来』昭和八・五）など、しばしば妄想、幻影、不気味などを素材としている。ただし、一人称の分身譚はこの「蠱惑」以外見当たらず、しかも情緒の美しさで評判を

得た「湖水と彼等」と「恩人」の間にあつて病的体験を扱うものとして、本作の存在は興味深い。一人称の語り手による本作は、豊島本人にとつて如何なる存在なのか、見極める必要がある。

川本三郎氏の説⁽⁴⁾によれば、大正期の日本文壇には、分身や自己分裂をテーマとする小説が相次いで現れてくる⁽⁵⁾。それは、日本に紹介された西洋の分身小説の影響であるという⁽⁶⁾。「蠱惑」もそうした背景の下に成立したと考えられる。先行研究では、吉田懋生氏は「蠱惑」について「豊島与志雄と象徴主義」⁽⁷⁾において、西洋文学——エドガー・アラン・ポオの「ウィリアム・ウィルソン」⁽⁸⁾が本作に影を落としていて、と指摘する。ところが、吉田氏は両作について四箇所類似点しか挙げておらず、更なる検討と解釈が必要と思われる。一方、関口安義氏は、本作が成立した時期に、豊島はベルギーの神秘主義思想家・戯曲家メーテルリンクから影響を受けていると指摘するが⁽⁹⁾、この点はなお検討を要する問題である。そうした側面は本作からも窺えるものの、先行研究ではあまり言及されていない。

本稿では、西洋文学・西洋思想が本作に与えた影響を検討しつつ、

吳 若 彤

作品を解釈するものであり、前述したポオの「ウィリアム・ウィルソン」及びメーテルリンクの思想という二点を中心とする。まずは、吉田説を踏まえ、両作の対照について更なる考察を行い、本作が「ウィリアム・ウィルソン」の手法を踏まえて分身というテーマを展開したことを詳細に検討する。次に、メーテルリンクの評論「LA VIE PROFONDE」が本作の表現とモチーフを与えた影響を検討する。それを踏まえ、創作背景と照らし合わせながら、一人称語りの「蠱惑」が作者とつて如何なる作品なのか、考察する。

本論に入る前に、まず梗概を確認しておきたい。青年「私」は、その頃、昼間には空虚と倦怠しか感じなかったが、夜になると、心が鏡のように澄んでくるのを覚える。万物の魂が潑刺と「私」の心の中に甦るようで、「私」は世界の創造主になったような大きな歓喜を感じる。ある晩、「私」はよく立ち寄るカフェーで見覚えのある男に出会う。それ以後、カフェーで出会うたびに、男はいつも「私」に似た格好をし、二人とも同じものを注文する。いつか「私」は、彼から何かを盗まれていることに気づき、恐怖を感じるようになる。被圧迫感が重なるうちに、男に挑戦し始めた「私」は、男を真似して中折帽を被ったり、男の嫌な煙草をわざと吸ったりする。にもかかわらず、魂まで彼に吸い取られそうになり、生命力がほとんど夜の方に流れ込んだように感じた「私」は、ついに男を殺そうとする。しかし、事前に用意した懐剣を持ってカフェーで会った時、男から和解の手を差し伸べられ、異様な嬉しさを感じる。男とワインの杯を交わした「私」は、二人が夥しい物の魂と一緒に一つの大きな生命体に融けてゆくように感じ

る。カフェーを出た「私」が男を抱擁しようとした時、胸に収めた懐剣に気づき、着物の上からその鞘を男に握らせた瞬間、男が駆け出したので、「私」も駆け出し、自宅の玄関に倒れてしまう。その後、医師の診断をうけた「私」は、ひどい神経衰弱だといわれる。母の看病の下で落ち着いてきた「私」は、数日後、男について記し始める。書いた物を母に見せ、古い金蒔絵の手文庫にしまった後、「私」はただぼんやりと祈るような心持で空をみつめる。空から何か「私」の心まで降りて来る。

一、ポオ「ウィリアム・ウィルソン」とのかかわり

前述の吉田氏は、本作の成立に、エドガー・アラン・ポオ (Edgar Allan Poe, 1809 ~ 1849) の「ウィリアム・ウィルソン」が影を落としている、と指摘する。ポオは十九世紀のアメリカの詩人・小説家であり、怪奇で象徴的な作風が特徴である。1839年、ポオは分身をテーマとする「ウィリアム・ウィルソン」を発表した¹⁰⁾。邦訳では、大正二年、谷崎精二訳の単行本『赤き死の仮面』¹¹⁾所収版が最初である。

豊島が実際にこの作品を読んだかどうか、吉田氏は確認しておらず、類似点も四箇所しか挙げていない。稿者も、随筆や雑誌アンケートに散見される愛読書などへの言及を調査してみたが、関連記録は見つからなかった。ただし、詳しく両作を比較してみると、ほかにも類似点が見られる。吉田氏は『ポオ全集』第一巻¹²⁾に所収される、中野好夫訳の「ウィリアム・ウィルソン」に従って両作の比較を行っている

が、「蠱惑」が成立した大正三年と時間的に近い訳を参照したほうが適切であるため、前掲谷崎精二訳を参照し、両作を比較したい。まず、谷崎訳によりあら筋を確認する。

本作は、イギリス人男性ウィリアム・ウイルソンが、悪徳により人格が壊滅した過程を回想して語る形式である。中学校時代、ウイルソンは名前や容貌まで自分そっくりの同級生と出会う。二人の間には色々な駆け引きが起こるうち、ウイルソンは段々と恐怖を感じ、貴族学校のエトン⁽¹³⁾に転校する。数年後、オックスフォード大学でウイルソンが学友をカモにしてイカサマのカルタばくちをしている最中、もう一人のウイルソンが突然現れ、そのしわざを暴きます。主人公は退学処分されるが、ヨーロッパ大陸に渡り、以後もそうした生活を続ける。しかし、もう一人のウイルソンはいつもその場に現れて不正の邪魔をする。そのため、ウイルソンにはベテン師の悪名が立ち、どこにも居場所がなくなる。そこで自分の敵に復讐するため、ウイルソンは旅に出、もう一人のウイルソンを捕らえて殺してしまう。もう一人のウイルソンは死の間際に、「お前はお前自身を殺して了った事ぞ」という。ここで、ウイルソンは自分の良心の化身を滅ぼしたことが暗示される。その後、ウイルソンは過去の罪を後悔し、汚名に苦しむ。

一—— 類似点

「蠱惑」を「ウィリアム・ウイルソン」と対照させた結果、類似点は以下のようになる。なお、吉田論文で指摘された類似点と合致するものは、次の2・8・9である。以上の三点の他に吉田氏は、二人の

主人公が同じくマントを着ていると指摘する。すなわち、本作の「私」は「男」と同じくマントを纏っているのに対し、ウイルソンがエトンでもう一人のウイルソンにゲームトリックを暴かれた場面でも、二人は同じく珍しい毛皮のマントを着ているというのである。吉田氏が参照した中野好夫氏の訳は確かにマントであるが、谷崎訳では外套である。「外套」と訳するのは、『ポオ・ポオドレール』（筑摩世界文学大系37、小川和夫「ほか」訳、昭四十八・十二）所収「ウィリアム・ウイルソン」も同じである。原文は「cloak」である。谷崎の時代に近い英和辞典―明治三十四年十一月の『新英和辞典』（和田垣謙三著、大倉書店。国会図書館近代ライブラリーに拠る）では、「cloak」は「外套、被物」の意。また、明治四十三年十一月の『学生英和辞典』（上野陽一著、博報堂。同右）では、「cloak」は「外套」の意。いずれも「外套」としている。なお、現行の英和辞典（『スーパードictionary』英和辞典』第四版、学習研究社、平成二十一・十二）によれば、「cloak」は「そでなしの外とう」の意である。英語原文で読んだ豊島が、当時の日本の学生の身なりとして「マント」の方が適当と考え、「マント」と訳した可能性もあろう。「インバネス」のような丈の長い、ゆったりした袖無し外套のイメージである。とすれば、さらにこの点で両者の類似性は高まるといえよう。

1、一人称の回想の形

「蠱惑」は、副題「冬夜、瞑目して座せるある青年の独白」とあるように、「私」がその頃の出来事を語り始める形式である。一方「ウィ

リアム・ウィルソン」は、書き出しで、「私」がウィリアム・ウィルソンと名乗り、この近年背徳に墮落してきた過去を振りかえって告白する形式であり、いずれも一人称で過去を振り返って物語る設定である。

2、その人と遠い昔に会ったと記憶している点

「蠱惑」の「私」は、男について、「私は彼を前に幾度も見たことが確にある。少くともそのカフェーで前に二度見たことがあつた。通りでも見たやうだ。旅の記憶にも彼の顔がある。それから私はのび上つて記憶の地平線の彼方に彼を探した。幼い折、小児の折、私が生まれない前、其処にも彼の顔がある」とする。

「ウィリアム・ウィルソン」でも、ウィルソンはもう一人のウィルソンについて、「其れはずつと昔の私の小児時代の幻ろげな夢——記憶其れ自身が未だ生じなかつた時分の放恣な、混乱錯雜した記憶を我胸に思ひ起させられた事である。ずつと昔の或る時——果てしなく遠い過去の或時期に、我が眼前に立つた此の男と知己になつて居たのではあるまいか」と思っている。

3、主人公が、自分が分身と類似していることに苛立つ点

「蠱惑」では、二人は服装と行為の二点で類似する。服装では、「私」と男は最初から同じくラクダのマントを纏っている。その後、男は「私」を真似し、それまでつけていなかった頸巻をする。「私」は男のその物真似に苛立ち、男と同じく中折帽を被る。一方、行為のほうでは、

カフェーで男はいつも「私」が注文したい品物を先に注文している。「私」もあとを追って同じものを注文する。「私達の何れか、何かを飲んでゐる時、それを見て後から来た方が同じものを注文するのは別に不思議はないんだ。然し私は只頭の中で考へたきりちつとしてゐることがある。その時は屹度彼が私より先にそれを女中に云ひつけるのだ」などである。つまり、外見のみならず、二人は考えることまで共通しているのである。そのため、「私」は「私が考へること、行ふこと、それをみんな彼奴が盗んでしまふんだ」と恐怖を感じる。

「ウィリアム・ウィルソン」でも、外見をはじめとして、ウィルソンはもう一人のウィルソンが自分のことを真似しているのに気づく。もう一人のウィルソンが喉に障害があつて高く声が出せないこと以外、二人のウィルソンはほぼそっくりである。ウィルソンはその物真似に苛立ち、更に戦慄を感じる。「同じ名！同じ身体の風采！此のアカデミーへ同じ日の入学！而して私の足取りや、声や、癖や、挙動に對する執拗な、無意味な彼の物真似！〈略〉恐れに打たれ、背を這つて行く戦慄を感じて、」などとある。

4、周囲に対し絶対的な位置に立つと思つている主人公が、男（ウィルソン）だけはコントロールできない点

「蠱惑」の「私」は、カフェーで自分が世界の中心に居ると思つて瞑想している。その最中、男が突然、黒い影のように私の世界にやってくる。「私」は自分が万有の物象に生命を与える創造主だと思つが、その男だけは例外である。「やがて私の心はその世界を抱擁し、温い

息吹まで暖めてやるのだ。そして其処に深い生命が創造される。私の心はかく現実を孕んでそれを生命の世界へ産み落すのである。私はその世界の母なんだ。私は其処にある凡てを力強く愛する。(略) みな私が彼等に魂を与えてやるのだ。只かの男ばかりはどうも私の世界には入つて来ない(略) 兎に角彼奴は私に対して潜越なんだ。私は苛らくしてきた」などがある。

「ウィリアム・ウイルソン」も同様である。中学生時代、主人公は餓鬼大将として同輩の間に威勢を揮っていたが、一人だけ、つまりもう一人のウイルソンだけは私の勢力に靡かなかつた。「實際熱烈な横柄な私の性癖が直ちに私を学生の中でも抜きんで、特徴ある者になした。而して漸々と自然に私は私より余り年上でない人々の間に唯一人の例外を除いて優勢を占める様になつた。その例外と云ふのは、何の縁故も無くつてしかも私と同じ姓、同じ名の、——大して驚くべき事情でもないのだが、——一人の学生であつた」「私の持説を暗々裡に攻撃し、私の意見に服従する事を拒み、私の専横な命令には何でも彼でも干渉した」などがある。

5、「私」と男(ウイルソン)との対立は二人の間だけのことで、周りの他人はその駆け引きに気づかない点

「蠱惑」では、カフェーの女給も二人の駆け引きに気づいていない。また、男が「私」の魂を捕えようとした際、他の客がカフェーに入ったために中断されるが、客たちはそのことを「何にも知らないんだ。そして何にも見えないんだ」と「私」は語る。

「ウィリアム・ウイルソン」でも、「私」はいつももう一人のウイルソンに言動を干渉されるが、誰もそのことに気付かない。「ウイルソンの反抗は非常に私を当惑させた。人の前では彼の主張を常に威嚇しようとして心掛けて居乍らも、秘かに彼を虐れ、彼が安々と自身を私と対等に振舞つて居るのが彼の真に優れて居る証拠の様に思はれた。一層当惑の度が増した。如何しても圧到されまいと云ふ考へが始終私を苦しめた。然し此の優勝——いや此の対等と云ふ事さへも私以外の誰にも気が着かれなかつた」とある。

6、「私」は相手のせいで勢力範囲・活動範囲が削がれる点

「蠱惑」の男は、徐々に「私」の世界にある万有の魂を吸い取り、更に「私」の魂まで狙っているように「私」には感じられる。「彼は私の世界を次第に食ひ減らしてゆく。(略) 私は次第に孤独になるのを感じる。凡てが私に背いて彼の方へ靡いてゆくのだ(略) 彼は何時の間にカフェーの中に自分の影を濃く蓄積してしまつたのだ。そして凡てを私から奪つた上、私の胸の中に忍び込んで来やうとしてゐる。彼奴がちつと私の魂を狙つてゐるのを私はよく知つてゐる」とある。

「ウィリアム・ウイルソン」でも、ウイルソンは分身に邪魔され、背徳者の悪名が立つたために、社会での行動が制限されるようになる。「オックスフォードに於ける我が名譽の破壊者、ローマにおける我が野心、パリーに於ける我が復讐、ネーブルスに於ける我が熱烈なる恋、又はエジプトに於ける彼が不屈にも貪慾と名づけたところの我が所業、是等を妨げ挫いた」とある。

7、主人公が男（ウィルソン）に対してついに殺意を抱く点

「蠱惑」の「私」は、男の圧迫に苛立ち、男の嫌いな煙草を吸ったり、男を真似して中折帽を被ったりするなど、何回も「復讐」（嫌がらせ）を繰り返すが、凡て徒勞に終わる。そこでついに「私」は、男への殺意が生じる。

「ウィリアム・ウィルソン」でも、もう一人のウィルソンが主人公の悪行をいつも暴き出すので、ついに彼を殺そうとする。

8、凶器の対応—懐剣と劍

「蠱惑」では、執拗な挑発に苛立った「私」が、男を殺そうと自宅から懐剣をもち出す。「私は家に帰って自分の室に在る小さい懐剣を懐に隠した。（略）私は自分で知らないまに直にカフエーの中に突進した（略）私は彼の胸の所へちつと眼を据えた。何かさつと流れた。私は右手に懐剣を握つた。刃が真黒なんだ。それを彼の胸の中に力を込めてつき立て、やる」。

「ウィリアム・ウィルソン」でも、仮装舞踏会で主人公は、血紅色の帯に下げた劍で、同じ服装のもう一人のウィルソンを刺し殺す。「彼奴は全く私と同じ服装をして居た」「私は酷たらしい程凶猛に幾度も幾度も彼の胸に劍を突き刺した」。

9、相手を殺害後（または、その意図を知られた後）、主人公が精神のショックを受ける点

「蠱惑」の「私」は、男との和解後、着物の上から男に懐剣の鞘を

握らせる。すると男は、「私」から攻撃されると勘違いしたせいか、駆け出してしまふ。男との共感が失われたと思つたためか、「ある黒い大きい翼が私の心を掠めて飛んだ。頭の中にがら／＼と物の壊れる音がした」とあるように、「私」は精神的衝撃を受ける。

「ウィリアム・ウィルソン」では、もう一人のウィルソンが死の間際、主人公に、お前は自分自身を殺したのだ、と言う。もう一人のウィルソンとは、主人公の良心だったことが暗示される。「彼が喋つた間私は自分自身が喋つて居るのだと想像する事が出来た」「お前が勝つたのだ。私は降参する。然し今後お前とてもやはり死んで了つたのだ（略）私の中にお前が生きて居たのだ——而して私の死に於て——実はお前自身である此の姿に依つて見よ——如何に全くお前はお前自身を殺して了つた事ぞ」とあるように、「私」の死が暗示されて終わる。

以上、両作にかなりの類似点が存在するのは明白であろう。遠い昔に会つたような気のする相手は、「私」の行動を妨げるため、「私」は次第に相手を憎み、殺意を抱くようになる。しかし、実際に相手を失つてしまつた時には、精神的な衝撃に打ちのめされる。これは、相手には「私」の精神の一面が投影されていることを暗示する。相手の言動によつて、「私」の心の矛盾が触発され、更に自己と他者（相手）との衝突という形で、これを具象化させたと考えられる。すなわち、一見対立した二人の駆け引きと見えたものは、実は似通つた他者に託された、「私」の心内の相克だつたと考えられよう。従つて、二人が交渉する一部始終は、「私」だけが一方的に妄想した内面のドラマであり、

そのため他の人には気付かれなかったと思われる。要するに「蠱惑」は、他者に「私」の心の反映としての分身を設定し、いわゆる本体と分身の交渉を通して「私」の心理的葛藤を描き出す手法を「ウィリアム・ウィルソン」から受容したと考えられよう。

一―二 相違点

以上のように、「蠱惑」において「私」の葛藤を表す技法は、「ウィリアム・ウィルソン」を受容したものであった。しかしその一方で、両作には相違点は何箇所も見られる。

1、本体が分身と会う空間の設定

「ウィリアム・ウィルソン」において、ウィルソンが分身に出会う場所は、中学校やエトン、オックスフォード大学など、ウィルソンの活動に応じてきわめて多様である。ウィルソンにおける善悪は、社会道徳に寄り添うものだからである。従って、分身は本体に付いて各地を移動することになる。

一方「蠱惑」では、二人が初めてカフェで出会って以降、男はいつもカフェに限って現れ、「私」との駆け引きがなされる。つまり、二人の交渉はカフェという一つの空間に限定されるのである。

そのことから、「私」はカフェで初めて自分の葛藤に気付いたことがわかる。なぜ、カフェでなければならなかったのだろうか。それは、「私の心の広さと室の広さとがぴつたりと合ふのだ。其処には何にも私の心の領域を越えた処から来る眼付がないのだ」とある

ように、カフェという空間が、自分の心にぴつたり合うものだったためであろう。

「私」が抱える葛藤は、あくまで個人的な感覚である。カフェが「私」の心にぴつたりするならば、そこに心を騒がす外部の干渉が存在するわけがない。「私」にとってカフェは、誰にも邪魔されず自分の内面に没入することのできる環境だったのである。

このことは、「私」がカフェと自宅の二つの空間を行き来することも、葛藤が浮き彫りになることにつながるだろう。カフェと自宅は、対比されたイメージである。カフェでは、羅紗のカーテンがあり、客は洋服を着ているなど、西洋のモダンな要素が随所に見られる。それに対し、「私」の自宅は伝統的な日本家屋で、母は銘仙の着物を着、古い金蒔絵の手文庫などもある。このように、二つの空間ははっきりと相対化されている。そこを行き来する「私」は、異なる世界を行き来するかのようである。自宅は、「私」にとって現実の日常生活に当たる空間であり、対照的にカフェは、現実や日常とかけ離れた場所と考えられる。つまり、「私」が日常を離れた環境にいたからこそ、普段、気付かない心の内奥を見つめられるようになり、分身に出会うような不思議な出来事に接したのではないだろうか。

2、分身との類似性の実態

「ウィリアム・ウィルソン」におけるもう一人のウィルソンは、学校の生徒に認識されていたので、実在の人物ではないかと考えられる。末尾で、分身を刺した主人公にその分身は、鏡か自分の肖像のように

見える。「大きな鏡、——最初うろたへ乍らもさう見てとつた——が今や全く前に何も無かつた処に立つて居た。而して私が極度の恐ろしさを抱きつ、その方へ歩み寄ると、青ざめて血に塗れた姿をした私自身の肖像が力無げによるめき乍ら私を迎へる様に進んで来た」とある。更に、類似点3で確認したように、二人の姿は酷似している。

しかし、「蠱惑」の「私」と男の造型にはかなり相違があり、むしろ両者の相対性が強調されている。男が女中に注文したりする以上、それは第三者にも認識された存在のほゞである。類似点3で示したように、交渉が深まるにつれて男は「私」の外見を真似し、思考まで似通うようになるものの、姿かたち自体には根本的な相違がある。例えば、「私」は特に男の突出した額と美しい頬を意識している。外見も、初対面の際には鳥打帽を被つた「私」に対し、男は中折帽を被つている。また、最初に頸巻をしたのは「私」だけであるが、後には男も頸巻をするようになる。さらに、「私」は喫煙するが、男はしない。しかも、以上のような相違点の強調は、男が実在の他者であることを示していると考えられる。「私」にとって、男が「私の知らない存在を彼は持つていゝる」「彼は殆んどその心臓の存在をさへ私に知らさなかつた」とする記述もこれを裏付けよう。

3、本体と分身の関係

前述のように、「ウィリアム・ウイルソン」におけるウイルソンと分身の関係は、悪徳と良心の対立である。そうしたなか、ウイルソンは最後に自分の良心を表すもう一人のウイルソンを滅ぼし、自らの人

格が壊滅するまで、常に彼に敵意を抱いている。ところが、「蠱惑」の「私」と男の関係は段階的に変わつてゆく。最初、「私」は男に自分の魂まで何もかも吸い取られそうになり、敵意を増していく。しかし、その一方で「私」は、煙草を吸つたときに男が去つて行つたため、荒廢した孤独を感じる。つまり、二人は赤の他人同士であるが、互いに似た行動を取ることで、一種の親和性、相手に「蠱惑」された心理を獲得するに至るのである。

さらに、その後男への敵意から懐剣を懐ろにした「私」に対して、男は自ら和解の手を差し伸べてくれる。その時、「私」は男と一緒に一つの大きな生命に融けてゆくような幸福を感じる。「嬉しかつたのだ。(略)多くの温い魂が一つの大きい生命のうちに融けて流れる。私達二人が其処に居るんだ。私の心がその大きい生命の流れに融けてゆく」。

結末で「私」は、男が離れ去つたことで精神的な衝撃を受ける。いわば、二人の関係は、対立、和解、分離という構図である。このように、ウィリアム・ウイルソンのような一貫した対立の構図ではない変遷、また憎しみや恐れとともに親しみも感じるなど、矛盾した気持ちを抱くことが、本作の特徴となっている。

4、主人公が自宅に帰つたあと

本作の主人公は、ウイルソンのように悲劇な結末を迎えるのではなく、精神の立ち直りの道をたどる。男と離れた「私」は、自宅に帰つて養生をする。母の看病、空から降りてくる何かの啓示は、「私」に

癒しと救済をもたらすのである。この件こそ、本作が独自に発展させた設定である。終始精神の苦悩に囚われていたウィルソンに比べ、苦悩からの救済が示唆される。

二、分身に託された葛藤の意味と主人公の苦悩

ここまで、「蠱惑」が「ウィリアム・ウィルソン」の分身というモチーフを踏まえつつ、独自に発展させた箇所を確認してきた。四つの相違点は、分身にかかわる項目が大半であり、両作ともに、分身との交渉を通して主人公の葛藤を描き出していた。「ウィリアム・ウィルソン」の場合、善と悪を表す二人の対立から、主人公の罪意識がみえてきた。本作の場合、「私」の葛藤は、実在の他人に似通っていることが原因である。そうした葛藤の正体は何なのか、相違点を手掛かりに考えてみよう。

相違点2で検討したように、本作の「私」は、男という実在の別人によって、今の疎外された状態から抜け出したという願望が引き出された。また、相違点3から、「私」は不安感とともに男に心ひかれていったことがわかる。疎外されながらも他者に心ひかれるというのであれば、「私」は他者との関係を求めていたと考えられる。しかしなぜ、男が特にその対象になったのだろうか。また、相違点3で示したように、男と親しみたいのであれば、なぜ「私」は男に対して恐怖を感じたのだろうか。それについて、「私」と男のおのおの様子から考えてみたい。

類似点4のように、「私」は自らを、万有に魂を与える存在と考えていた。その世界は、「私の心に映り、私の意識には入^{マツ}つて来るものは、皆深い眼に見えない世界の象徴なんだ」と認識されている。すなわち、「私」が支配する世界は象徴の世界だと推測される。外界と合わず、倦怠しか感じない「私」が、象徴の世界で自分を創造主まで高めるのは、そうした世界認識によって疎外感から解放されようとする姿勢と考えられる。類似点6のように、「私」はその世界が男に支配されてゆくことに孤独を感じていた。「てやる」という攻撃的表現を多用しているのは、その現れであろう。

そうした姿勢をとる「私」が男にひかれるきっかけは、出会いの場所と男の特質とによるだろう。相違点1のように、カフェーは日常から離れた場所である。「私」はそこで、日常生活では会えないような男に出会った。また、その男と自分との共通点によって、「私」は男を気にし出すのである。二人が似た格好をしたり、同じものを注文したりするのは、互いの考えに近いところがあったからであろう。外界と合わず、普段の生活に理解者を持たなかった「私」は、自分と似た行動をとる男に思わずひかれ始めたのであろう。従って、題名に使われた「蠱惑」とは、「私」が思わず男に心をひかれるさまを述べた語であろう。いわゆる分身への関心、ないし意識しはじめることについて、渡邊正彦氏¹⁴は次のように述べている。

他者との関係を失って個人が孤立し、不安と無力感にさいなまれ、自己同一性が危うくなり、本当の自分が分からなくなり、他者との関わりを欲していながら、断絶を乗り越えることができず、自

分自身への関心しか持たなくなる。こういう内閉的状况が、分身や双生児への関心や願望を生み出すのだと思われる。(略) 双生児や分身を描くことで、内閉的状况におかれていた不安や恐怖を慰謝し、同時に、双生児や分身の存在がその危機的な内閉的状况そのものであることを示して、恐怖や不安の快楽を与える装置なのである。双生児や分身は、結局は、人間の欲望、すなわち欠如の隠喩として考えられる。

「私」の疎外された位置は、渡邊氏のいう「断絶」「内閉的状况」に当たる。そうした状況にある人間の欲望とは、「私」の場合、自分の理解者を求める気持ちであろう。つまり、男の出現は、自分の理解者が欲しいという、「私」の願望の具現化と考えられる。男のような存在がいかに重要かは、「私」が男への攻撃を控える際、実行したら自分も壊滅してゆくと想像する次の箇所から窺えよう。「私は右手に懐剣を握った。刃が真黒なんだ。それを彼の胸の中に力を込めてつき立て、やる。すつと刃が通る―何処までも深く通つてゆく。そして私は真逆様に深く―落ちてゆく……」。

ところが、「私」は願望の具現化である男に戸惑つてもいる。「私」は世界が崩れそうになったことを恐れ、更に、殺意まで抱く。そうした矛盾に陥つたのは、男の素性が知れなかったからであろう。

そこで「私」には、男に親しみたいという願望と、「断絶」(渡邊)を乗り越えられず、男と交流を始める勇氣を持たないという葛藤が生まれる。男にとらわれつつ、自分の存在を乗っ取られるような気がしたために、「私」は自分を混乱させる相手を殺害したい念まで生じた

のである。ところが、その葛藤は、男が友好の手を差し伸べてくれることで解消され、多くのものの魂と一緒に一つの大きな生命のうちに融けてゆくように感じられる。そこには、「私」が自分の世界を守る姿勢は見えない。「私」にとつて、自分の理解者になりそうな男と交流する嬉しさは、傷つく心配をはるかに超えていた。しかし、「私」が男と交渉する間に感じた葛藤と和解は、すべてが一方的な想像なのである。加えて、「私」が男に懐剣を示した時点は、二人が既にカフェーを一緒に出た後であった。カフェーは、相違点1で述べたように、現実を離れた場であり、従つてそこから出るといふことは、現実世界に戻ることにはひとしい。「私」の内面の葛藤を知らない男が、いきなり懐剣を示され、その傍から逃げ出すことは当然と言えよう。人間的な親しい関係を求めた「私」は、男の予想外の反応によつて精神的な衝撃を受けたのだが、その原因は、他人の心は不可知だといふ人間関係の覚束無さであろう。

三、空よりの啓示——メートルリンク

「LA VIE PROFONDE」のかかわり

ここまで、分身に託された葛藤の意味を検討してきた。ところが、「私」の衝撃はまだ終わっていない。帰宅後、母からの癒しにより精神的に落ち着いてきた「私」が、男のことを記した手紙を母に見せると、母は「眼に一杯涙をためて、これはしまつておいて暫く見ない方がいい、よと云つた。私はその涙の中にうち震へて泣いてゐる母の魂を

見た」とあるように、母の存在は、「私」の苦悩の解決に役立つてはいない。すなわち、傍にいる母は、「私」の苦悩に共感はしても、理解者ではなかった、と推測されよう。

母に言われるまま、手紙を手文庫にしまった「私」は、「胸のうち」にひそかに囁きつ、遠い空から下りて来るものがある。私は静にしてるなければいけないのである。そしてちつと祈るやうな心で居なければいけないのである」と感じる。そこに、「私」の救済があるようである。これは、いかにも神秘的な雰囲気溢れるシーンであろう。

関口安義氏は、神秘主義の色彩が豊島の初期作品に共通した特徴であって、ベルギーの神秘主義戯曲家・思想家モリス・メーテルリンク (Maurice Maeterlinck 1862～1949) の思想に影響されたものと指摘する¹⁵⁾。メーテルリンクがはじめて日本で紹介されたのは、明治三十五年に大塚楠緒子が『女学世界』に発表した翻訳戯曲「をさな児の最期」であった¹⁶⁾。それ以来、新たな死生観・生命観の問題に直面した知識人の間に、神秘的な情緒に溢れるメーテルリンクへの共感が広がった。森鷗外の「椋鳥通信」で翻訳や紹介がなされたほか、芥川龍之介の戯曲「青年と死」などにその影響が看取され、日本の文壇・劇壇を一時風靡した。メーテルリンクの季節と言われるほど、メーテルリンクの作品は昭和の初期まで続々と翻訳、紹介された¹⁷⁾。

そうした風潮のなか、豊島は「蠱惑」脱稿の翌月大正三年四月、東京帝国大学仏文専修の同人誌『自画像』創刊号に、「メーテルリンクの評論—LA VIE PROFONDE」を翻訳、紹介する。『新思潮』創刊号(大正三・二)の「編輯所より」に、「豊島は短篇で大いに光るのを書く筈

だしメエテルリンクの新しい論文を原作から訳すことになるかも知れない」との予告が掲載され、結局それは『自画像』に載せられたようだが、豊島の「LA VIE PROFONDE」への関心は、「蠱惑」創作前から既にあつたことが窺えよう。

「蠱惑」と対比した時、「私」の姿に「LA VIE PROFONDE」の思想が影を落としているように思われる。この評論の主旨は、無限との神秘的な交渉を通して、人間はすぐれた生に生き得る、というもので、「蠱惑」に影を落としたと思われる箇所は以下の通りである。

- ① 英傑とてもその傍に進みゆく一介の凡人より偉大だといふ他の理由を持たない、只その生存のある瞬間に於て、この無限との交渉の一つについてより鋭敏なる意識を有したといふ故のみである」
- ② 人の生涯のうちには或る日があつて、その時天は自らうち開けた。そして一個体の真の精神的人格が日附けらるゝのは殆んど常に此の瞬間からである」
- ③ 吾々は天の下孤独ではないといふ、また他の人々は接吻し或は涙を流し乍ら俄に心付く、「万有より神に至るまで善良にして聖なるもの、凡ての源は、かの余りに遠い星々に満ちた夜の後ろに隠されてある」と(傍線稿者。以下同じ)

以上の三点をまとめてみれば、人間は心身を無限に委ね、天よりの聖なる啓示を適宜つかめば、誰でも偉大な人格に進化できるといふものであり、人間はひたすら無限の力を頼りにして向上するものだ、という思想である。本作末尾の、「遠い空から下りて来るもの」とは、天から下された啓示に当たるだろう。また、「私」がその啓示を待ち

受けて祈る姿は、①②が示すような、啓示を意識してつかみとることに通じ合う。そこから、結末部の「私」は、メーテルリンクが唱える理想的な生き方に則ろうとしていると考えられる。空に隠された聖なる力は、英傑となるよう人を導くものであり、「私」はそれによって精神の苦悩から立ち直ることが示唆されている。

では、なぜ「私」は、最後にこのような神秘的な世界へ向かうのだろうか。男への記憶を封印し、人間関係への期待を諦めたあとで、「私」は超現実の世界に救いを求めたのである。その時点で「私」は既に、人間世界における疎外感から抜け出そうとするのを止めたというべきであろう。③によれば、星空に隠される聖なる力さえあれば、人間は孤独ではないことがわかる。そこで「私」は、人間世界ではなく、神秘的な超現実の世界に向かったと考えられる。ここからは、天啓によって精神の敗北を乗り越え、新たな生を待ち受けようとする姿が窺われる。人間関係の頼りなさを経てきた「私」にとって、そうした確固たるより所こそ、乱れた自分の心を支える真の救済になるだろう。

四、「蠱惑」の意味

ここまで、分身譚としての本作が、主人公が如何に孤独を乗り越えようとしたかを示したものであることを明かしてきた。

もう一度整理すれば、自分の世界に耽っていた「私」が、自分の理解者の現れを強烈に期待し、男に惹きつけられて交渉が始まるものの、その和解の意図を誤解して男が逃げ出たため、「私」はショックを受

けてしまう。その苦悩を受け入れてくれた母は、結局真の理解者ではなく、「私」は自分が孤独であることを再認識し、ついに超現実の神秘的な力にたどり着く、という流れである。男に蠱惑されることがきっかけで、「私」はそうした気持ちの変化を経験する。自分と他者との駆け引きにより、自分という「個」の不安定さ、すなわち自己を堅牢に保てない現実が露呈されるのである。「蠱惑」という語は、孤立した「私」が人間関係に踏み込みきっかけを表す一方、その心の弱さをも示唆しているよう。

「蠱」とは、まじないに使う虫であり、人を害する呪いや毒薬でも意味する¹⁹⁾。男に惑わされる「私」が嘗めた激しい精神のゆれ、神経衰弱の根本的な原因は、孤独の心情であり、日常生活で自分を理解する者がいなかったためと考えられる。本作で、「私」と実際に交流を持つのは男と母だけである。男との交流を通して、人間関係をめぐる願望と現実との食い違いが認識され、母との交流によって、いくらか親しくとも心の隔たりが存在することが示された。母の言葉に促されて男の記憶を封印するのは、「私」が他者との関係を断念したことを示すものであろう。

自分の世界認識から他者との関係へ、その断絶から超現実へ、「私」は自分の位置を変えてきた。それは、孤独に苦しむ「私」が、心を支える理想的なより所を求めてきた道程であり、本作はその一部始終を語ったもの、といえよう。

五、豊島与志雄と「蠱惑」

以上、本作と「ウィリアム・ウィルソン」及び「LA VIE PROFONDE」の対照を通して、主人公が人間関係と精神の揺れに悩み、最後に超現実的に救済を求める流れをみてきた。

ここで、「私」による一人称の語り手とは、作者にとつて如何なる存在なのか、見極めたい。

豊島は、「蠱惑」を創作した前後、つまり第一高等学校時代（明治四〇年代）から大学二年頃（大正三年）まで、デカダンのな生活を送っていたようであり、本作の主人公の姿には、豊島のその時期における様子と重なる箇所が見られる。以下、豊島自身の回想をいくつか紹介する。

丁度大学の二年頃で、高等学校時代からのデカダンのな生活が、次第に落着いて来まして、今度は又その反動として莫迦に真面目な、澄んだ生活に帰つて居た時の事です。（謂ゆる出世作よりも却つて思ひ出の深い処女作）『新潮』大正八・一）

私は嘗て、退廃的な自暴自棄に陥りかけたことがある。尋常なことは凡て面白くななくなつて、何か非常識な突飛なことばかりに心惹かれた。明るい輝かしいものが厭はしく、暗い悲惨なものばかりが好ましかつた。そして、昼間はぼんやりと下宿の室に籠つてゐて、夜になるとこのこ出かけてゆき、都会の暗い穴を探し求めるやうな気で、酒を飲んだり彷徨したりした。（父母に対する私情）『新潮』大正十三・七）

一高は寮生活が立前で全部寮に入るのが原則なんだが、僕はそれが嫌いで一年の一学期で寮を逃げ出して下宿生活をした。それで友人関係はあまりない。あれからずうつと孤独的にくらした。（座談会・私はどうして小説家になつたか）『文芸往来』昭和二十四・四）

以上のような昼間の退廃な気分と夜の彷徨の面影は、はっきりと「蠱惑」の主人公に投影されている。

豊島が、主人公のように神経衰弱に陥つたかどうか、関連記録は残っていない。しかし、この時期、豊島は確かに人間関係に悩み、前述の引用のように友人になかなか恵まれなかった。一方、関口安義氏の調査²⁰によれば、豊島はこの時期、僅かな親友の一人林原耕三と、二人の下宿先朝倉家の姉妹を恋するという複雑な関係に陥つていたという。友情と恋に挟まれる豊島の苦しみは、林原宛の何通かの書簡²¹からも看取される。また、その恋は、いつも自分の意志を尊重してくれる両親にも反対されたという。豊島はそのなかで、人間関係の覚束無さを強く感じたのであろう。本作の「私」の不安な気持ちがある程度豊島の実体験によるものではないかとの関口氏の推測は、上記豊島自身の回想によつて確実性を増すであろう。この時期の豊島の苦悩が、主人公の回想の中に凝縮されたのではないだろうか。

豊島は、大学二年頃にデカダンの気分から立ち直つた。メーテルリンクの「LA VIE PROFONDE」を翻訳、紹介したのもこの頃である。豊島がその評論を寄せた『自画像』創刊号（大正三・四）に、同人の木村幹もメーテルリンクの作品―童話劇の『アリアアヌと青髯』を翻訳・

紹介した。メーテルリンクへの関心は、同人間にもあったのである。そうしたなか、豊島が特にその評論を取り上げたのは、その説に共感して寂しい心の慰めを得たからであろう。実際、「豊島君は日常茶飯の間にも、彼の小説に現はる、如き、妙な神経から来る神秘の世界が実際あるらしい。其点に於て彼はメーテルリンクの一面とひどく共鳴するらしい⁽²²⁾」との評もある。『蠱惑』で、メーテルリンクの説を踏まえるように、主人公が救済にたどりついたのは、こうした背景によるものと考えられる。

以上のように、本作は、エドガー・アラン・ポオの「ウィリアム・ウィルソン」から分身のモチーフを借りる一方、メーテルリンクの「LA VIE PROFONDE」によって神秘的な超現実的に救済を求め、精神の敗北を乗り越えて新たな生を待ち受けようとする姿を描いた作品であった。その背後には、明治四〇年代から大正三年までのデカダンな生活と、そこからの脱却があった。本作は、そうした自己の心象の一部を作品化したものと考えられる。

付記

1、テキストの引用について、「ウィリアム・ウィルソン」は『赤き死の仮面』（泰平館書店、大正二・七）、「蠱惑」は『新思潮』第一巻第二号（臨川書店、大正三・三、複製版）、「LA VIE PROFONDE」は『自画像』創刊号（尚文堂、大正三・四）にそれぞれ拠った。引用に際して、漢字は常用漢字に改め、適宜ルビを略した。引用

文献は特記を除いて初出に拠った。

注

- (1) 『新思潮』大正三・二
- (2) 『帝国文学』大正三・五
- (3) 『豊島與志雄を論ず』『新潮』大六・一
- (4) 「自己分裂という物語」『大正幻影』川本三郎著、岩波書店、平成二十四
- (5) 前掲注(4)によれば、芥川龍之介「二つの手紙」(大正六・八)、谷崎潤一郎「人面痘」(大正七・三)、佐藤春夫「指紋」(大正七・七)、芥川龍之介「影」(大正九・七)、泉鏡花「眉かくしの霊」(大正十三・五)、梶井基次郎「Kの昇天」(大正十五・十)などがある
- (6) 前掲注(4)によれば、ポオの『ウィリアム・ウィルソン』(1839)、ドストエフスキー『二重人格』(1846)、オズカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』(1890)などである
- (7) 『日本の近代文学』作家と作品 吉田精一博士古稀記念 吉田精一博士古稀記念論集刊行会編、角川書店、昭和五十三・十一
- (8) 1980年、年度版の贈呈用詩文集『ギフト』に所収
- (9) 『評伝 豊島與志雄』関口安義著、未來社、昭和六十二・十一
- (10) 『世界文学大系33 ポオ・ポードレル』付録年譜を参照、中野好夫「ほか」訳、筑摩書房、昭和三十四・七
- (11) 泰平館書店、大正二・七
- (12) 東京創元新社、昭和三十八・十一
- (13) 今のイートンのこと
- (14) 『近代文学の分身像』十三頁、渡邊正彦著、角川選書、平成十一・二
- (15) 注(9)に同じ

- (16) 『明治翻訳文学全集 新聞雑誌編』四十九『メートルリンク集』、川戸道明・榊原貴教編、大空社、平成十一・五
- (17) 『大正生命主義と現代』鈴木貞美編、河出書房新社、平成七・四
- (18) 大正九年以後『メートルリンク全集』全八巻を統々と訳出した鷺尾浩氏の訳によれば、「深い生活」(『メートルリンク全集1』復刻版、鷺尾浩訳、本の友社、平成一・五)である
- (19) 『大辞泉』小学館、平成七・十二
- (20) 注(9)に同じ
- (21) 『漱石山房の人々』林原耕三著、講談社、昭和四十七・三
- (22) 『豊島與志雄氏の印象』『新潮』久米正雄、大正七・五

